

〈活動報告〉

## GCI 学生プロジェクト「日本社会の多様性」 ——実施の試みと課題——

ミラー 成三

### GCI Student Project “Diversity in Japanese Society”: Our Attempts and Challenges

Seizo MILLER

This is a progress report about a student-based project entitled “Diversity in Japanese society” run by the Global Communication Institute (GCI) since 2014. Activities of this project including a blind audition of participants, group works and a poster contest are held every fall semester for the promotion of intercultural and global understanding of Japanese and international students in the campus. As the coordinator of this project, the author is involved in the project’s design, promotion, and supervision of the participants. Based on the results of previous projects and interviews with participants, this report summarizes the characteristics the project and raises issues to be tackled for its improvement.

#### 1. はじめに

本稿では、グローバル・コミュニケーション研究所（以下 GCI と略す）で2014年より実施されてきた学生プロジェクト「日本社会の多様性」についての実践報告を行う。本プロジェクトは1年に一度、これまでに4回行われ、筆者は現場担当者のコーディネーターとして、すべての回に参加し、企画運営に携わった。まずはじめに、学生プロジェクトの目的と構成に触れてから、これまでの学生プロジェクトの概要を簡単に紹介する。次に、第3回の後に参加者に対して行われたインタビューで語られたことを報告し、最後に、これらを通して今後の学生プロジェクトの課題と、本学

生プロジェクトの意義について考えてみたい。

## 2. 学生プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は「学部、学科、国籍を越えた、在学生の国際感覚を高めると同時に交流を促すこと」である。つまり、異なるバックグラウンドの人と接した時、どのような問題が起きるか、そこでどのように調整していくかという経験を重ねることで、グローバル社会に出た時に、自分をもちながら相手との関係を作っていく力を養ってもらうことを目的として設定している。

この目的を達成するためには、国際交流パーティなどのような一過性のもの(山田、2011)ではなく、継続的な交流を促す内容でなくてはならない。学生が継続的に交流できる内容となるように考慮し、過去4回、「プロジェクトを通して、グローバル・コミュニケーションに関連するテーマについて、学生たちがグループでポスター制作を行う」という方法を採用してきた。これは、ポスターを制作するという実質活動を通して、今後の社会参加へとつながる力を養い、また継続的な話し合いの中で、相手を国籍や年齢によってではなく個人として見る視点、すなわち、相手はどのような歴史をたどってここにいるのか、どんなことを考えて暮らしているのかを知ってもらうことが重要だという考えのもと行ってきた。

これらの目的や方法は、プロジェクトの立ち上げ時に研究所運営メンバーはじめ、本学の学部留学生担当教員、留学生別科学内連携担当教員、そして留学生会の会長を交えた会議で基本的な方針が決定された。その後、コーディネーターである筆者とGCI所長による複数回の打ち合わせによって詳細を決定した。実施回によって多少の違いはあるものの、学生プロジェクトは基本的に以下の流れで行った。

## 3. 学生プロジェクトの基本的な構成

### (1) エントリー：応募用紙による応募

毎回異なるテーマを設定し、そのテーマに関するエピソードや考えを

## GCI 学生プロジェクト「日本社会の多様性」

応募用紙に記入し、応募してもらおう。それらの応募を学内にまとめて掲示する（Blind Audition を行った場合のみ）。掲示の際は、名前や学科などの個人情報公表せず、閲覧者は掲示されたエピソードや考えのみを見ることができるようにする。

### (2) グループ結成：Blind Audition によるグループ結成

エントリーした学生に、掲示されたエピソードなどから一緒にグループを組みたい人を選択してもらおう。テーマに関する考えが自分と近い人／遠い人など、誰を選ぶかは自由となっている。その希望をもとに、コーディネーターがグループを作成する。その際、学部や学科、留学生や日本人学生がバランスよくグループに含まれるように注意をしてグループを決定する。

なお、第1回と第2回はBlind Audition を行っていたが、プロジェクトの手順が多すぎると学生が混乱するのではという意見が挙げられ、第3回以降では行っていない。

### (3) ポスター制作：グループによるポスター制作

テーマに合わせて自分のチームの考えをまとめ、ポスターを制作する。テーマに関連していればどのようなポスターを作成するかはグループに委ねられ、自由である（第4回は学生の負担軽減のため、ポスターデザインのテンプレートを提供して自由に活用できるようにし、内容は自分たちで考えてもらった）。

初回のミーティングのみコーディネーターが日程を調整するが、その後はグループのメンバーで話し合っ日時を決定してもらおう。ポスター制作時には、コーディネーターがサポートを行うこともある。

### (4) コンテスト：全学からの投票

ポスター作品の完成後、それらをまとめて掲示し、学内の学生、教員、職員すべてが参加可能な投票によって優秀な作品を決定する。ポスターを出品した学生全てに Certificate を授与する。優秀な作品には優秀賞、





ティングが遅れるアクシデントも発生した。

第1回と同様、初回のミーティングはコーディネーターが日程を調整し一緒に参加する形で行ったが、第2回では途中での参加は行わなかった。また、第2回では全グループにパソコン環境があることが初回ミーティング時に報告されていたため、第1回のような物的なサポートも行わなかった。

学生たちには1か月弱のあいだ週1回以上ミーティングをしてもらい、ポスターを作成してもらった。しかし、提出されたものが、企画側の意図に沿うものではなかったため(例えばインターネットから流用したと思われる写真の使用、穴場観光スポットではなく有名な観光地について書かれているなど)、締め切りを延長して再度ミーティングを行い、修正点を伝えて再提出を依頼した。しかし2度目の締め切りに提出されたポスターにも大きく修正されたポスターはなく、企画側の意図とは異なる内容であった。長期休暇前でそれ以上の延長ができなかったため、優秀作品なしとし、投票を行わず全員に参加賞を授与することとなった。

### 第3回プロジェクト:

The screenshot shows a project website with the following content:

- 2016年度 秋学期のテーマ**: 食神の達人 「スパイス」
- プロジェクトの流れ**:
  - 10月7日 **エントリー**: エントリー締切と発表
  - 10月10日 **エントリー締切**: 4時締切(発表時間)発表されたGCIのWeb上に発表
  - 10月11日 **グループ発表準備**: エントリーと発表準備と発表します
  - 10月11日 **グループ発表準備**: お名前をあなたのグループメンバーとメールアドレスの欄を記入し、メンバーの連絡先を記入して、ポスターの作り方を教えてください。
  - 11月1日 **グループ発表準備**: 11月1日(土)発表し、グループ発表をします。
  - 11月10日 **ポスター発表準備**: 発表の準備をします。
  - 12月10日 **コンテスト**: 発表の準備をします。
- 更新しました!**: 10月7日締め切り
- 優秀賞**: 発表賞
- 発表賞**: 発表賞
- GCI賞**: 発表賞

第3回プロジェクトでは、「食神の達人『スパイス』」というテーマを設定した。具体的な活動として、KUIS内にあるアジア食堂「食神」の料理をヒントに、スパイスそのものやスパイスを使用した様々な料理についてエピソードをまとめてもらうことにした。第3回では「食神」とのコラボレーション企画が実現し、優秀なポスターを同食堂でトレーシートとして使用してもらえなくなったため、学生たちにはトレーシートを想定したポスターを制作してもらった。

## GCI 学生プロジェクト「日本社会の多様性」

告知は今までと同様、学内にポスターを設置するとともに、特に何人かの授業の教員に協力いただいて授業の前後の時間に告知し、同時にエントリーシートの配布も行った。また留学生に対しては、第2回と同様、オリエンテーション時に告知の時間を設けていただき、宣伝を行った。また Blind Audition に関しては先述の通り、企画段階でプロジェクトの手順が多すぎると学生が混乱するのではという意見が挙げられたため行わなかった。告知に関しては、過去2回以上に力を入れて行ったものの、参加応募は中国人留学生2名、日本人学生2名の計4名にとどまったため、全員で1グループの結成となった。

これまでと同様、初回のミーティングはコーディネーターが日程を調整して顔合わせを行った。第3回では、週1回以上のミーティングを行い、ミーティング後に話し合った内容を記録した報告書を提出してもらうという形をとった。報告書には次回のミーティング予定日も記入してもらい、コーディネーターも可能な限りミーティングに参加した。このような形で1か月強のあいだグループで作業を進め、トレーシートを作成してもらった。トレーシートの完成後、投票を行う予定であったが、今回は1グループのみの参加であったため投票は行うことができなかった。そのため表彰ではコンテストの結果として授与されるべき「優秀賞」は、授与すべきではないという意見も挙げられた。一方で食堂の関係者からは、優秀な作品であると評価され、トレーシートとして正式に採用していただけることとなった。このことなどを踏まえて参加したグループには、特例として GCI 大賞を設け、表彰を行った。

### 第4回プロジェクト：

本年度開催された第4回目は、「食神の達人『スイーツ』」というテーマを設定した。告知はこれまでと同様、学内へのポスターを設置、各授業での告知、留学生に対するオリエンテーションでの告知などを行った。それに加えて、本学の学内メーリングリストである多文化交流ネットなどを利用した告知を行った。なお、第4回からは紙のエントリーシートを廃止し、QRコードやアドレスと入力してアクセスする WEB エントリーシートの



## 5. 追跡調査

第3回の表彰式終了後、参加者である中国人留学生2名と日本人学生2名の計4名には、追跡調査として、インタビューを行った。インタビューはコーディネーターによって、半構造化インタビューの形式で行われた。以下その内容をまとめていく。

インタビューでは、すべての参加者から「楽しかった」というような、プロジェクトに対する好意的な意見が多く語られた。中には「後輩にもすすめたい」といった意見もみられ、プロジェクトが概ね好意的に受け止められていたことがわかる。

その他にも留学生からは特に、日本人学生と交流する貴重な機会であったことが報告された。第3回に参加した2名の留学生によると、彼女たちのような学部留学生は、大学では日本人学生と交流する機会がほとんどないのだという。多くの学部留学生は、授業が終わるとアルバイトに行く必要があり、学内で行われるようなイベントや、サークル活動に参加することができない。また授業では日本人学生と話をすることもあるが、授業によっては留学生グループと日本人グループで分かれて席に着くことも多く、交流すること自体あまり多くないようである。今回のプロジェクトでは、週に1回継続的に活動を行っていくうちに、プロジェクトに関する話だけではなく、雑談のような話もたくさんできたという。また、自主的にLINEのグループを作成したことによって、ミーティングの時以外でも連絡を取り合っていたようである。その中で、2名とも「はじめて日本人の友達ができたと語っているように、プロジェクトを通して友人関係を構築することができたことが報告されている。実際、4名のインタビューではダンスサークルに所属するメンバーのパフォーマンスを見に行ったという話や、今度4人で辛い料理を食べに行く、というようなことも語られていた。

日本人学生の方からも、留学生の人とグループワークをする機会がなかったのが、新鮮であったという報告がされた。2名の学生によると、グループワーク自体は授業で行うこともあったというが、授業には日本人学生しかいなかった。そのため、留学生とグループワークのような活動を行

う機会はなかったのだという。また、留学生との継続的なミーティングを通して、今まで気づかなかった視点を持つようになったことも報告されている。例えば、留学生の集まりで仲良くなった、中国人の友人を複数もつ学生は「がんがん意見を言う」というイメージを持っていたという。しかし、プロジェクトを通して以下のような気づきがあったことを語っていた。

わたし結構、中国の人ってもっとなんか、がんがん意見言って、結構自分が主導権で進めていくのかなって思ったら、そんなになんか、別に意外と控え目だし、あんまりがんがん言ってこないから。でちょっとなんかこんな感じのいいんじゃないみたいなき感じで言ってくるのが、ちょっと、すこし意外でした。

このような気づきをした彼女は、本人が「こういう人もいるんだな」と語るように、相手を国籍ではなく、より個人的なレベルで見る視点が芽生え始めていたようである。

また、このようなイメージとの差異はもう一人の日本人学生も感じていた。彼女は中国語の授業を受けており、その先生の振る舞いから中国の人に対して様々な、例えば「強い」「動きが速い」というようなイメージを持っていたという。しかしインタビューでは、「日本語で話できたら、あんまり変わらないのかもしれないですね」と語っており、自分の持っていたイメージと実際に接した2名の留学生とのギャップを感じていたようである。このような語りからは、先の例と同様に、国籍による違いというレベルから、より個人的なレベルで相手を見る視点を持つようになってきたことの現れとも言えるだろう。

また、第4回プロジェクトにおいても、表彰式で「楽しかった」という意見が多く聞かれ、ある参加者からは「この度は、貴重な機会を作っていただきありがとうございます。日本以外の出身の人や(自分の)専攻以外の人と話すことが少なかったので、とても楽しかったです!」という感想が送られてきた。このように参加した学生たちにとっては、留学生や日本人を問わず、自分の専攻以外の学生と交流するよい機会となっていたよ

うである。

## 6. まとめと今後の課題

最後にこれまでの学生プロジェクトを総括し、今後の課題として考慮すべき点を述べたい。

### (1) 告知とエントリー方法

4回の学生プロジェクトを通して、参加人数は11名、10名、4名、14名と決して多くはない。しかし、特に第3回においては、様々な授業に参加させていただき、700名近くの学生に対し告知をすると同時にエントリーシートも配布していたため多くの学生にプロジェクトの存在自体は周知されていたと考えられる。エントリーシートを配布した際に、その場で記入をしている学生もいたようであるが、授業の時間を提供いただいている関係上、それらをすぐに回収することができなかった。このことも、学生の参加を妨げた要因として考えられるだろう。

第4回においてはWEBエントリーシートのみとしたが、最も多い14名の参加があった。これは、QRコードの読み込みやメールからの直接のアクセスなどですぐにエントリーができる手軽さが要因となったものと考えられ、第3回から一定の改善が行われたと言えるだろう。今後も学生が気軽に参加できる方法を模索していく一方で、さらに参加者を増やしていくならば、多くの学生が参加しやすいような内容を考えていく必要もあるように思われる。

### (2) Facilitator の役割

これまでの学生プロジェクトでは、コーディネーターはfacilitatorとしての役割(ファン他、2004)も担ってきたが、参加の度合いは各回において異なっていた。特に参加の度合いが低かった第2回においては、ポスター制作において企画側の意図がうまく伝わらず、上述のような結果となってしまうこともあった。それに対して参加の度合いを高めた第3回においては企画側の意図を正確に伝えることが可能となり、高評価を得るまでのポス

ターを作成できたばかりでなく、インタビューでも語られた通り密度の濃い交流を行うことができていた。一方で、ポスターの内容については、学生たちがミーティングの回数を重ねるごとにLINEなども活用しながら積極的に相談をするようになっており、facilitatorとのタテ関係から学生同士のヨコ関係への広がり(村山、1993:141)も見られた。以上のことから、facilitatorがミーティングに参加することは有益な結果につながると言え、今後もfacilitatorという形で運営側も関わっていくことは重要だろう。一方で、第3回のようなfacilitatorの関わり方は参加グループが少なかったために可能となったものである。

第4回においては、コーディネーターは各グループのミーティングに2回の参加となったが、どのグループにおいてもヨコ関係への広がりが見られた。これはコーディネーターがLINE等の連絡先の交換を促したり、報告書のフィードバックにおいて全員で相談するように促したことが要因と考えられる。これらのことから、facilitatorはグループの目的(ポスター制作)を達成するためにアドバイスを送る役割と同時に、ヨコ関係への広がりを促進させる役割も担っていくべきであると考えられる。この関わり方であれば、参加者が増加した場合においても対応することができるだろう。

第3回終了後のインタビューでは、留学生からは日本人との交流の機会となったことが、日本人学生からは留学生に対する新しい視点について語られた。これらの語りや、第4回終了後に学生たちから送られてきた感想などからもわかるように、本プロジェクトの目的の一つである学部、学科、国籍を越えた交流はある程度達成されたように思われる。また、インタビューを行った日本人学生の2名が感じていたような新しい視点は、今後彼女たちが接触場面に参加する際の行動にも影響を与えうるものでもあるだろう。そしてこれこそが、より多様化が進むこれからの社会生活において、重要となる視点でもある。

特に第3回において、参加者は少人数にとどまったのは事実である。しかし本学生プロジェクトは、学部や学科、国籍などを越えた深い交流を目的としたものである。継続的な交流というプロセスを通して、学生たちが

## GCI 学生プロジェクト「日本社会の多様性」

らこのような報告がされたということは、一つの大きな成果であると考え  
る。むろん参加者は多いほうがよいであろうが、少ないことを理由にこの  
ような深い異文化体験、また学内交流の機会をなくすというのは、学生た  
ちにとっても、今後の社会にとっても有益なことではない。これまでの課題  
を踏まえて、今後も学生プロジェクトを継続、発展させていきたいと思う。

### 参考文献

- ファン、サウクエン・徳永あかね・堀内みね子(2004)『留学生支援のための  
International Encounter Group の可能性』異文化コミュニケーション研究所共同  
研究プロジェクト研究成果報告書
- 村山正治(1993)『エンカウンター・グループとコミュニティーパーソンセンタード  
アプローチの展開』ナカニシヤ出版
- 山田智久(2011)「国際交流に関する大学生の意識調査: PAC 分析調査の結果を中心  
に」『佐賀大学留学生センター紀要』第 10 号、29-40 頁